

活動報告書

報告者氏名：浜中 明子 所属：大宮北特別支援学校

記録日： H 2 5 年 2 月 2 7 日

【対象児（群）の情報】

・ 学年

小学部 1 年男児（A）

・ 障害名

精神運動発達遅滞、広汎性発達障害、

・ 障害と困難の内容

A 児：日常生活全般において支援を必要とする部分が多い。歩行が不安定で、全身を上手くコントロールできない。興味、関心の移り変わりが早く、集中して取り組むことが難しい。簡単な指示は理解することができ、サイン、クレーン動作などで、要求を表現できることがある。指先で iPad を細かく操作することは難しい。

【活動目的】

・ 当初のねらい

①iPad を介して教員とやり取りを行う中で人との関わりを豊かにし、コミュニケーション力を高め、自分の気持ちを表現する経験を重ねる。

②iPad の操作に慣れ、手指の操作性を高める。

・ 実施期間 H 2 4, 5 月～H 2 5, 2 月

朝の遊びの時間、昼休みなど。

・ 実施者

浜中 明子

・ 実施者と対象児の関係

A 児の担当教員

【活動内容と対象児（群）の変化】

・対象児（群）の事前の状況

視覚優位で、感覚過敏な面があり、周囲の物事に対して注意や集中が難しい。衝動性が強く、iPad を反射的に投げってしまうことも多々あった。促すと、「やって」「ちょうだい」のサインができる。

・活動の具体的内容

①iPad の使用経験のある児童と一緒に活動したり、教員と一緒に使用することで、iPad に対して興味を持ち、「やりたい」という気持ちを育て、やりたい気持ちをサインなどで教員に意思表示をしたり、他の児童の操作を眺め、画面の動きを一緒に楽しむように促す活動を行った。



②様々なアプリを提示し、本児童の操作性や好みに合ったアプリを見つけ、操作する中で、手指の操作性を高める。



・対象児（群）の事後の変化

5 月当初は、全く興味を持たなかったが、夏休み前には、使用経験のある児童の操作を横から眺める段階から、実際に触れてみる段階に自然に移行していった。また、2 学期には iPad の「直感的な操作性のよさ」で、指で触れたものが動き出すという因果関係に気づき、特に「動くお絵かき」がお気に入りとなった。自分で人差し指を作り、アイコンを操作することはまだできないので、教員の手をとり、自分の指の代わりにアイコンを押すようお願いする様子が見られるようになった。上手く操作できなくても、根気よく操作しようとする様子も見られたり、画面の移り変わりを楽しんだりする様子も見られた。

【報告者の気づきとエビデンス】

・主観的気づき

児童が iPad 操作の因果関係に気がついたことで、iPad に対する意識が変わり、「楽しいもの」と受け止め、教員に対して自ら「おねがい」をすることや、すぐに投げ出さず、集中して取り組むという変化が見られたことは、本児童にとって大きな成長となった。iPad だけでなく、他の場面でも自ら「おねがい」をする場面も見られるようになった。

・その他エピソード（画像などを含めて）

朝の会などで、手遊びや音楽の動画を使用した。絵本などでは集中することが難しかった児童だが、iPad の画面には集中することができ、子どもたちにとって「何を観るべきか」という視覚の整理にも役立つことが分かった。

活動報告書（例）

報告者氏名： 高橋麻衣子

所属： 東京大学

記録日： 2011年6月28日

【対象児（群）の情報】

・ 学年

小学5年生の男児2名（A, B）

・ 障害名

A 児：ADHD, B 児：学習障害

・ 障害と困難の内容

A 児：集中力がない。文字に注意を向けるのが難しく、教科書を読むのが苦手

B 児：話したり聞いたりすることは普通にできるが、読むことが遅く、本を読むことをいやがる

【活動目的】

・ 当初のねらい

読むことが苦手な全般的な学習への意欲をなくしている対象児に、自信を取り戻すきっかけを与えたいと考えていた。授業がわからなくて自信がないというよりは、わかっているのにテストの点数がとれないために学習意欲を失っているように観察されたため、テストに工夫が必要だと考えた。対象児は読むことに困難を抱えているため、iPadによって読むことを支援することで、テストを受ける態度がどのように変化するかを観察することを目的とした。

・ 実施期間

iPad を使って社会科のテストを2回実施した。実施日は11月27日、12月18日。

・ 実施者

福島紀子（特別支援教育士）

・ 実施者と対象児の関係

通級の担当教員

【活動内容と対象児（群）の変化】

・対象児（群）の事前の状況

対象児は同じ学級に在籍し、どちらともテスト成績がふるわなかった。これまでのテストにおいては、通常学級で一斉に実施していたが、2人とも読みに苦手感を持っているために開始早々にあきらめて投げ出してしまふ様子が見られていた。

・活動の具体的内容

iBooks のアプリを利用した。読みの困難さを補償するため、テスト問題をスキャンして PDF 画像として iBooks に取り込んだ。これによってテスト問題をピンチアウトによって児童自身が好きなように拡大することが可能となり、見やすく読みやすくなるのではないかと考えた。このアプリを使用したテストは通級において特別支援士の監督下で行なった。

・対象児（群）の事後の変化

iPad を使用した対象児は 2 人とも、自身で拡大をしながら最後までテストに取り組んだ。

【報告者の気づきとエビデンス】

・主観的気づき

対象児はこれまでテストに対する意欲が著しく低かったが、iPad の画像拡大機能によってテストに書かれている文字が読みやすくなったのか、テストを受ける意欲が向上したように感じた。

・エビデンス（具体的数値など）

表 1 に、対象児のテスト得点と、学級の平均点を示す。A 児の社会科のテスト得点は、iPad を使わないと平均 33 点（学級平均 85 点）であったのに対し、使用した 2 回のテストの点数は 85 点（学級平均 83 点）、90 点（学級平均 92 点）となった。一方で、B 児の得点は実施前平均 27 点、実施後 50 点、53 点であった。iPad を使った感想を尋ねると、2 人とも「これを使ったほうがやりやすい」と答えた。

表 1 実践前後のテスト成績

	実践以前	iPad 使用 1 回目	iPad 使用 2 回目
A 児 (ADHD)	33	85	90
B 児 (LD)	27	50	53
学級平均	85	83	92

・その他エピソード

A 児は iPad を使ったテストによって成績が著しく向上し、自身も「これがあればわかりやすい」と学習に対する意欲を見せたので、教科書を同様にスキャンして iBooks に入れて、通常学級での授業に使わせている（図 2）。今後、この学習効果を検討していく予定である。一方で、B 児についてはテスト成績が A 児ほど向上しなかった。この原因として、彼は視覚だけでなく音韻的な処理の困難さを有していたことが考えられる。今後、テスト問題をワード文書や ePub 形式で作成して VoiceOver で読み上げさせ、この効果を検証するつもりである。



図 1：電子化したテスト 図 2：通常学級内での様子